

している。

注射の方法は「左歯槽枝の内側表面に沿って、下歯槽神経に触れるまで刺入」し、それによって半側の舌、下唇、歯肉、歯まで麻酔された、とある。このことから、彼らが行ったのは口内法ではなく、下顎骨下縁内側から下顎枝内面の骨に沿って刺入する口外法であることが分かる。これは、顎口腔領域の解剖を熟知していなければならない術法である。

斯く、最初の下顎の伝達麻酔は、Hall によって上顎の伝達麻酔につづいて追加報告された。下顎における実験は、歯科医師 Nash と相前後して行われたことになるが、施行日が特定されていることから、Halsted を下顎孔伝達麻酔の先駆とする。

ともあれ、Halsted の天才的な発想と独創、幾たびも自ら被験者となった Hall の勇気と献身、それに歯科医師 Nash の積極的な協力、彼らの進取の気性とチームワークが、注射による局所麻酔法の扉をひらいた。そのリーダーである William Stewart Halsted (1852—1922) は、“局所麻酔法の開発者”として認定されなければならない。

20) 麻酔学書誌学的研究 (第6報)

—“Dental Materia Medica”にみられる麻酔に関する記述—

Bibliography of Anesthesiology (6th Report): On “Dental Materia Medica”

日本大学松戸歯学部 ○石橋 肇
渋谷 鉦
小池陽一郎
谷津 三雄

Hajime Ishibashi, Koh Shibutani, Yohichiro Koike and Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

演者らの一人谷津が架蔵する“Dental Materia Medica”のなかから麻酔に関する記述を中心に報告した。

今回資料とした“Dental Materia Medica”は、11.5×17.5 cm 大、全 108 ページからなり、背文字として“DENTAL MATERIA MEDICA, WHITE, D6 W58, N.U.D.S.”の記載がみられ、“LOFT”のシールが貼られている。また、表紙を開くと“Northwestern University Dental School Library, Chicago, Illinois”のシールが貼られていることから、背文字の“N.U.D.S.”は“Northwestern University Dental School”の略で、この本は“Northwestern University Dental School Library”で製本され、茶色のハードカバーがつけられたものと思われる。

“Preface”に「広告されていたり、歯科学会で討論されていたり、雑誌に書かれている種々の医薬品の特性、歯科での使用方法及び応用方法に関する情報を求めるおびただしい手紙類が寄せられ、このような質問に即座に答えられるように準備をしておくことが望ましくなってきた。」とあり、本書出版の意図を知る。また、「博物学、植物学、化学に関して組織的に言及しようとは思わなかった。なぜなら、ほかの本に書いてあることがわかりきっている些細なことでこの本を厚くすることが賢明とは思えないし、また、わかりきったことだが、それらが全身の治療法の一つとは考えられなかったからである。独創的な考えを伝えるものではなく、同業者が頻繁に使う薬品のリストとそれらを歯科での使用する場合の指針を信頼できる権威者から簡単にまとめたものである。…歯科大学の卒業生および医学・歯学文献上の多くの権威者にすでに近づいている人々は、当然、この本を見ても何も新しいものを見つけないだろう。また、種々の薬品の応用方法に対しすべての人が賛意を示すことは不可能であろう。しかし、出来るだけ、権威者に匹敵する人々と同業者の指導的人々の批評とにより、この本を便利で、役立ち、確実なものにする予定であった」から、本書の編集方針を知る。

INDEX から本書の内容をみると、“Abbreviations and symbols”から始まり、“Wine of opium”まで、129 項目の記載がみられるが、“Acetate of morphia”と“Morphia, acetate”のように重複が

みられるため、その項目数は約 100 である。

本書にみられる麻酔に関する項目は、○STRO-
NGER ETHER—ther Fortior. PURIFIED CHL-
OROFORM—Chloroformum Purificatum. ○NIT-
RATE OF AMMONIA AND NITROUE OXI-
DE. ○BICHLORIDE OF METHYLENE. ○
TETRACHLORIDE OF CARBON. ○LOCAL
AN STHESIA. の 5 項目であった。

21) Wilhelm Busch の風刺画 “Der hohle Zahn” について

Wilhelm Busch's Caricature “Der hohle
Zahn”

鶴見大学歯学部 別部 智司
佐藤 恭道
戸出 一郎
雨宮 義弘

Satoshi Beppu, Yasumichi Sato, Ichirou Tode
and Yoshihiro Amemiya

18世紀半ばからヨーロッパに流行していたいわゆる風刺画は、18世紀末にリトグラフの発明によって広く社会に浸透し、優れた作品がヨーロッパ各地で出版されるようになった。

今回、紹介した W. Busch の漫画は、19世紀半ばにおける歯科医師の抜歯に関する風刺画である。当時ドイツでは、歯科医療は大道香具師から徐々に専門の歯科医師の手に移っていたのである。

W. Busch はドイツの詩人、画家、漫画家で、1832年4月15日、Hannover に近い Wiedensahl に生まれ、1908年1月9日、Mechtshausen にて没した。はじめ、技師を志して工科大学で学んだが途中で志を変え、絵画を学ぶため19歳から22歳までの間、Düsseldorf, Antwerpen, München の美術大学に通った。しかし近世の大画家の作品に接して自らの限界を知り、画家になることを断念した。その後、グループ「若いミュンヘン」に参加し、当時、庶民生活の風刺画を連載していた週

刊誌 “Fliegende Blätter” や漫画新聞の “Münchner Bilderbogen” に投稿するようになった。W. Busch は両誌に1859年以後1,000枚以上の木版画を描き、50編の München 一枚絵を作り、10編の単行本を刊行した。

これら多くの作品の中で “Der hohle Zahn” は1860年に、漫画新聞 “Münchner Bilderbogen” Nr. 330 の38版に掲載された連載こま割り漫画で、その後1900年に漫画単行本の一部として Braun & Shneider 社から出版されている。

本画は全部で25図から成り、各図の下には2行の韻文で説明が加えられている。前半の13図は主人公の農夫 Friedrich Kracke が激しい歯痛に襲われ、七転八倒の苦しみにさいなまれる様子である。煙草を吸ったり、酒を飲んだり、水で冷やしたり身体を温めたりしてみるが痛みは治まらず、妻をぶったり、ベッドの下にもぐり込んだりするが効果無く、ついに決心をして医者を訪れる。後半12図は抜歯の様子である。歯科医師は長いガウンをまとい、長いパイプを口にして、気取った身振りで応待し、手にした歯鍵で強引に抜歯する。そして、堂々と謝礼を受け取る。おかげで Friedrich Kracke は痛みもなくなり、再び食事を楽しむことが出来るようになるという内容である。

この風刺画は、歯痛に苦しむ平凡な農夫と尊大な歯科医師の姿をさり気なく対比させることによって、見るものに滑稽さと一抹の哀愁を感じさせるものである。小市民的な自己満足や偽善をあばき、笑いものにすることによって何かを訴え続けた W. Busch の精神が、この風刺画にもよく表れている。

本画は当時の歯科医療に関する世相を知る上で一つの資料になるものと考えられた。